

金属製品製造業

企業の使命を果たすための手段としての技能検定

7-23 株式会社 アライ

建築金物からダンプカーやクレーン車の部品まで

愛知県一宮市は古くから繊維・織物産業が盛んな地域として知られる。織物の歴史は古くは平安時代まで遡ることができるが、現在は業界再編の煽りを受け、地域内の産業構造も様変わりしてきている。株式会社アライはそのような一宮市の中であって、建築金物製造・施工の他、工作機械やエレベーター、ダンプカーなどの部品加工を手掛ける企業である。経済状況が低迷する中で、増収を続けられる秘訣は、建築用金物から、工作機械までの金属部品を扱える業務の幅の広さだと社長の新井敏男氏は説明する。1次加工から全ての工程を自社でまかなえるのも同社の強みの1つである。



「Total Metal Factory」の字が躍る
アライ社屋

地道な挑戦が社員や企業を変えていく

アライでは、社内の技術水準向上を目指し、工場板金の数値制御タレット・パンチプレス板金作業、機械板金作業の検定受検を奨励している。今では全ての社員が技能検定合格を目標の1つとしているが、このようになるまでには長い時間がかかったと新井氏は振り返る。

「最初は会社で受検を奨励しても、合格率がさほど上がりませんでしたね。社員にとって会社からの押しつけのように感じられたのかもしれない。何とかならないかと考えていると、検定合格者を多く出している企業では、受検する社員のやる気が高いことに気がついたんです。そこで本人の自覚が重要だと気付きました。」

しかし、前向きな姿勢が重要だと気付いても、実際に社員を動機付けするのは難しい。アライでも、その後しばらく地道に技能検定に挑戦していくしかなかった。

しかし、少しずつ合格者が出てくると、自発的に勉強しようとする社員も現われ、今では社内で社員が主体となって勉強会を開催し、検定にまだ合格していない社員が受講するようになっていったという。「検定に合格するためにこつこつ努力する姿勢や、社員が教え・教わるという関係を通してお互いを高め合うという企業文化もこの中で生まれてきた気がします。」と新井氏は語る。

社会に貢献するための手段としての技能検定

新井氏は「アライの顧客は社会。社会に貢献するのが技能者だと考えています。」とアライで働く技能者の使命をシンプルに表現する。「若い社員がアライの製品が製造されるプロセスを見て、ただ板金を曲げたり、溶接したりといった、『作業そのもの』が仕事の目的だと考えてしまってはモチベーションは上がりません。例えば、自分が営業して受注したり、設計したり、実際に加工したりした製品が、得意先から褒められたといった経験をする事で、社会に自分たちのもの作りが貢献しているんだ、ということを実感することが重要だと思っています。社会に認められているという実感を持っているからこそ今日の前の鉄板を加工しているんだ、という意義が生まれる。技能検定はそのための手段だと思っています。」



普段の作業風景

会社のビジョンを個人の目標に落とし込む工夫

社会に貢献するためのものづくり。アライが掲げたビジョンは従業員個人の目標にまで落とし込まれる。同社では5年ごとに企業として目指すべきビジョンを設定し、それを受けた各部署のリーダーが部署ごとの目標を定め、それを受けて従業員一人一人が今年の目標を立てていくというプロセスが確立されている。



新井敏男社長

技能検定合格も個人が立てる目標の1つの項目である。そして半期に一回、技能検定合格も含め、社員が自分でたてた目標のうち、達成できたものを発表する成果発表会が開かれる。「そうすることで社員のモチベーションを高めることが狙いです。」社会を支えるヤル気ある社員の存在が、アライを支えているようだ。

株式会社 アライ

- 業種：金属製品製造業（建築金物製造／施工）
- 設立：昭和25年
- 住所：愛知県一宮市
- 従業員：66名
- 代表者：新井敏男
- 技能士：11名

技能士へのインタビュー

柚木 秀明氏（32 歳） 2 級工場板金技能士
佐藤 孝氏（35 歳） 2 級工場板金技能士



工場ではないところで活躍する技能士

アライでは、工場内で部品を加工する前の段階として、顧客から送られてきた図面をデータ化して工場の機械が扱える形式に変換する業務も重要な工程である。

今回インタビューに答えてくれた柚木技能士と佐藤孝技能士はともに CAD/CAM システム（製品設計および製造のためのシステム）を扱うために工場板金職種の数値制御タレット・パンチプレス板金作業の 2 級に合格している。現在購買課の所属となっている柚木技能士は、もともとは CAD/CAM を用いて図面を CAD で開いて加工機械が扱える形式にする業務を担当していた。「入社前から CAD を扱える仕事に興味を持っていて、社長と話して、やってみれば、ということだったので入社を決めました。」とアライ入社の経緯を説明する。

購買部にいて実感する技能検定のメリット

柚木技能士が技能検定に挑戦しようと考えたのは、会社にて検定受検を奨励する企業文化があったからだそうである。また、同社の社員の多くが技能検定合格を自分の目標の 1 つとして設定しているのを知り、自分も技能検定に挑戦してみようというモチベーションが生まれたという。「アライは工場内の設備が充実しているのが特徴だと思います。それゆえに難しい仕事なども顧客から任せられることも多いんです。そういう仕事で使う図面を読み解くのがなかなか難しいですね。図面の読解力は現場経験を積まないとなかなか身に付かない能力だと思います。」と、もともといた部署（生産技術課）の業務を柚木氏は振り返る。「自分でデータを作って、それを元にして現場が完成品に仕上げていく。そのでき上がりを見ると達成感がありますね。仕事のやりがいはそのあたりにあるのかもしれない。」

今の部署である購買部は CAD を扱う機会は少なく、材料の手配や取引先との価格交渉などが主な業務となる。一見、技能検定が意味を持たないような業務のように聞こえるが、メリットはがあると柚木技能士は語る。「お客さんと話すときに、技能検定を経験していると話せる内容の幅が広がりますね。現場では使うことが少ないような用語も頭の中に入っているので、お客さんがその言葉を使っても対応することができるのがメリットですね。」そんな柚木技能士は 1 級工場板金技能検定合格を

目指す。「自分の技のレベルをもっと高めていけたらと思っています。それが当面の目標ですかね。」

現場では培えなくなったキホンの習得

続いてインタビューに答えてくれた佐藤技能士も工場板金職種の数値制御タレット・パンチプレス板金作業 2 級の検定に合格している。顧客から送られてくる図面を加工機械が扱えるデータに変換するのが主な業務である。入社 5 年目の佐藤技能士は、高校卒業後に二つの会社に勤めた後、「CAD を扱う仕事がしたい。」ということで、アライに入社した。現在は生産技術課で、建築用の金属部品や移動式クレーンの運転席下部フレームや工業用ライン危機機の搬送面といった、複雑な形状の部品の図面を扱う。



技能検定の勉強で得られる広範な知識

「自分の仕事は図面という二次元のものを、工場の機械が加工できるように三次元の立体的なデータに起こしていくというもの。それが、この仕事の難しいところです。部品を自分の頭の中でイメージしながら作業をする必要があるので、かなり想像力が必要なんですよ。」と仕事について語る佐藤技能士。日々の業務において技能検定が役立っていることにはどのようなことがあるのだろうか。「例えば、製品を製造するときにメッキをかけるのですが、現場で採用している方法以外にもいろいろあるということは、検定の勉強をしないと分からないんです。検定合格のための勉強は今まで知らなかった事柄について理解するためのいい機会だったと思います。新しい方法を知っていたことで、業務の生産性や、仕上がりの質の向上といったメリットもありました。」

現在は 1 級工場板金技能検定合格に向けて準備を進めている佐藤氏。「もし機会があれば、数値制御タレット・パンチプレス板金作業以外の他の検定にもチャレンジしてみたいですね。」と、新しい知識の獲得に意欲を見せていた。